

2017/2/25

## (日々雑感 32)



かなり逼迫した状況下で、自分の実情、実態、危うさ、危なさをどうやったら聞き手に理解してもらい、手をさしのべてもらえるか？

通常は「駆込み訴え」でしょう。とにかく、一方的でも良いから話して訴える。その臨場感と迫力。それが最短の意思伝達方法だと。

しかし、それは間違えか幻想なのだと痛感しました。今回の件で。

相手に伝わらないのです。相手の経験から想像、連想できる範囲外、想定外のことなので、相手にそれを受ける口がないのです。感じる感覚、想像器官がないのに、何も感じられるはずがないのです。

行けども行けども一方通行、返事無し。通常の100万倍のエネルギーを使ってでも、そうなるだけでした。声大きい分、その後の静寂が堪え（こたえ）ました。

手間はかかります。冷静であることも要求されます。時間が無い中でそれを行うのはかなりきつい作業ですが、それしか方法がないことが分かりました。それを以下にお伝えします。

まず、聞き手の立場になんとかして、なります。

「正当性を持っている」と自分が確信している、山ほどある言いたいことを持った圧倒的に優位だと思われる自分。その自分の優位を、まず、なんとしてでも抑えるのです。

そうすると、相手が聞いても分かりそうもない、分かりたくもない、重すぎる、耳をふさぎたくなるものがわかります。そういう相手が、圧迫を受けていたり、嫌がりそうなものをまず瞬時に省きます。追っかけたり、押し込んだりしても反発を食らうだけで、時間の無駄だからです。

次に、これまた瞬時に、相手の経験則内で、想像が出来そうな事柄だけを選び抜いて、それのみに絞って伝えます。可能な限り短く。しかも抑え目にして相手の想像力が働ける余地を残すことが肝です。相手を話に参加させ、同じ土俵に上がってもらうためです。

自分が苦しいときに、自分を最優先したいときに、あえて、敢えても自分を抑え、相手の立場を鑑みる。相手の立場に身を置き換える。

相手の、圧倒的楽ちん立場であるが故に、真実みに欠けるであろう思いに駆られて、発したくても発せられない、声なき声の聞き役に回る土壇場の入れ替わり。

そうすれば、こちらの伝えたいこと、分かって欲しいことの100分の1しか伝えられなくても、大声で訴えて、莫大なエネルギーを使って、訴えた本人はかなりスカッとするかもしれないのですが、結果、事実や思いは何も伝わらない、孤絶、断絶、徒労、で自己満足のカタルシスでしかない、0よりは良いのです。可能性が残るからです。自分が相手になれば、相手が自分になってくれる可能性があるからです。

「急がば回れ」が基本です。直情、手抜きではなく冷静、こまめなのです。

これが軍事兵法の考え方なのです。

軍事兵法では、武器の使い方などは、最後の最後。

軍事兵法の奥義は、煎じ詰めれば「戦わずして勝つ」の一言なのです。

敵を直接倒すのではなく、敵の周りを味方で取り囲み、身動きできなくすることで刀を抜くことなくすることなのです。敵の城に砲弾を撃ち込むのではなく、敵に命の綱である塩を送って和睦にいたり、自ら開城させることなのです。北風を強めてコートを吹き飛ばそうとして、逆にしがみつかせる結果を招くのではなく、太陽で気温を上げ、コートを自ら脱ぎたくなるようにさせることなのです。

戦いを回避するために、手間暇を惜しまず、いかに有効な戦闘回避策（非戦必勝の定理）を見いだすかなのです。

重要なのは（むしろ本戦であるのは）、物理、肉弾戦の前の、情報戦であり、神経戦であり、心理戦なのです。

本当の戦いは前線ではなく、むしろ後方で既に起こっているのです。ですから、その後方戦で食い止め、前線での戦いにまで行かないように考えられ、仕組まれた、流血などの人的犠牲も家屋の喪失などの物理的損失も出さないロスミニマムが奥義なのです。

何故そのような発想になるかと言えば、実戦になれば、心理的、経済的被害が甚大になり、人と人の心、人の生活が傷つくからです。その回避が軍事兵法の真髓なのです。

実戦が好きなのは、思想的対立や宗教的対立、あるいは民族的対立すらも、自分たちにとってのみ「健康で文化的な生活」を維持するための「おいしい話」として利用する武器商人や巨大金融資本など、つまり軍人ではない、「お金が背広組を着たような人たち」が主なのではないかと思ったりもしております。戦場を見た人間は決して実戦など好まないと思うのです。

それはさておき、

今回の場合は、最後の「伝えたい相手の心理になり、自分を抑えて、自分が欲するセーフティーネットワークを創る」という心理戦の応用例をお話しさせていただきました。

ぼくのことを右翼だと言っている方がいらっしゃることは存じておりますが、ぼくはただ、生き延びる術、つまりぱっと見て、さっと判断して、すっと実行しないと危ないときに、どうすれば良いかだけをお話ししているだけなのです。

右翼だ、左翼だといっているのは、後方での飲み屋さんか食卓です話です。  
それは、それであっても一向に差し支えないし、自分も平時ならそうしていたかもしれません。  
それを踏まえて、まあ、時間の使い方も自由ですし、そこで何を話し、どう解釈してどう表現するかも自由ですから、どうのこうのは申し上げません。  
ただ、折角の珍しい経験なので、お役に立つかもしれないと思い、日頃聞き慣れぬ考え方、ものの見方の披瀝を、余計なこと思いつつも、敢えて呈させていただきました。  
最後に、軍事兵法とは、もちろん全部ではありませんが、その真髄に於いては、「闘い」を避けるための「戦い」の方法論の集まりのような気がします。  
非常に皮肉な、意図せぬ逆説ですが、「誰かに守られた平和」ではなく「自分たちで守る平和」を築くためには、非戦必勝の定理に基づいた軍事兵法の考え方が、思いがけず思考あるいは指向する上での極めて具体性を持った方法論としてとても有効、有用だということです。  
ですからその、ものの見方や考え方、着眼点、発想方法などを食わず嫌いせず、偏見を捨てて、自分のアタマの片隅に置いておくだけでも良いかもしれません。  
いかんせん、古今東西、時空を越え、主義主張を越えて、心底は平和（平らかで和やかな日々）を願う古の人たちが残してくれた直接戦闘回避の貴重な智恵の塊なんですから。